みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

3.4.5　ミュージアム資源の活用から地域資源の活用へ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-01-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菅沼, 彰宏 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008324

上羽・中牧・中山・藤原・森茂編『調査報告　学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ』
国立民族学博物館調査報告　138:203-206(2016)

3.4.5　ミュージアム資源の活用から地域資源の活用へ

菅沼　彰宏
（公益財団法人かながわ国際交流財団）

キーワード：地域資源，博物館資料，学習プログラム

1　展示を活用していかに地球市民学習を効果的に進めるか

「大阪のみんぱくで，教員向けのワークショップがあるのですけど……」。

国際理解教育学会の会員で，みんぱくにも詳しい同僚職員からその存在を教えてもらったのが2005年。「教員ではないけど参加できるのかな」「大丈夫なんじゃないですか？校外学習の受け入れもしているのだし……」。

当時私の職場は，神奈川県立の博物館類似施設の管理・運営を県から受託し，国際理解や国際平和に関する展示室を活用しながら，学校の校外学習を受け入れる事業を行っていた。もともと県直営で運営し，県職員が運営していた館を，われわれ第三セクターの財団職員が運営する方が「専門性」があるということで委託されたのであるが，学芸員がいるわけでもなく，教育普及のエデュケーター経験がある人がいるわけでもなかった。また，開館から委託されるまでの間に，県職員が直接運営した時期を挟んでいたために，開館にあたって資料を収集し，展示や保存を担当した学芸員や，学校対応などの学習プログラムを作成した外部の専門家などから展示や収蔵資料，プログラムのねらいなど直接説明を受ける機会もなく運営を受託したところであった。そのため，県職員がこれら「専門家」から伝授されたノウハウや知識をさらにわれわれが引き継いで，それを忠実に守りながら運営をしていた。そんな中でも少しずつ主体的に「地球市民学習」の教材の開発や，事前学習として役立つ「資料」をスーツケースに詰め込んで貸し出す「カレーキット」など地域の教員や外部の専門家の力を借りながら進め始めているところだった。

これまでも開発教育や国際理解教育など様々な形態でのワークショップやセミナーなど数多くが開催され，わざわざ大阪までいかなくても東京周辺でも開催されているが，人類学等の専門家と教育学の専門家，それに現場の教員，さらには「みんぱく」を活用した研修という組み合わせに惹かれて，早速申し込んだ。

その後も何度となく参加させてもらったのだが，なんといっても素晴らしいと思ったことは「みんぱく」のもつ圧倒的な展示資料である。さらに，その「資料」の意味を十二分に理解をしている専門研究者の存在である。

過去私が参加した，例えば「一粒のカカオ豆から」のワークショップでいえば，南北

問題の構造的な関係や歴史など頭の中で理解し，アメリカの展示場に見に行く。また，「先住民とわたし」（中山京子担当）では，「先住民」という言葉から連想するイメージについていかに小学生から大学生に至るまで，さほど変わらないステレオタイプをもっていることを浮き彫りにした調査研究の結果を共有した上で，アイヌ民族の展示を訪問した。そこで専門家の研究者の方から文化人類学的な解説を受けることができた。参加型のワークショップで自ら体験をし，学習意欲を高めたところで，展示された実物資料に触れるというこのセミナーを何度か参加をすることで，ミュージアムがもつ「資料の力」を改めて実感した。

みんぱくのアイヌ民族のチセの前で，監修された萱野茂さんがいらした時の話をいきいきと語ってくれた講師の熱い語り口……。私にそこまで自分が運営する施設の展示を一つ一つ理解し，熱く語れるだろうか。展示だけでなく，収蔵されている資料についても，全然理解できていないし，生活の様子や背景など，手にしたとたんに浮かびあがる資料がどれだけあるのだろう。展示や収蔵している資料について深く把握する。それがあった上で，学習プログラムはどう組み立てていくとよいか，まずは自らが持つ資源を知る，そこから始まると思った。ミュージアムの関係者にはごく当たり前のことなのかもしれないが，私にとってはこの研修に参加することでようやく気がついたのであった。

実際には，まだまだ中途半端なところで終わってしまっているが，収蔵品についても県民から寄贈された戦時中の暮らしを物語る資料を学習内容に応じて限定的に展示することなども行うようになった。

2　ミュージアムから地域社会の資源へ

そうした展示施設を運営している間，なんどとなくこの博学連携教員研修ワークショップには参加をさせてもらった。学校での実践的な活動報告，「みんぱくの収蔵資料・展示資料」の効果的な活用について聞くたびに，私が運営する施設での資料の活用の仕方，ワークショップと展示室の見学との組み合わせにいかに生かせるかということでは常に新たな発見や刺激を受けることができた。

ところがこの施設も「指定管理者制度」が導入され，その２期目に私たちの団体が施設の管理運営から外れてしまうという大きな「事件」が起きてしまった。展示室をもたず，収蔵品も当然もたないし，地球市民学習分野の実践をする機会もなくなってしまったため，しばらく博学連携教員研修ワークショップへも私自身の足が遠のいてしまった。

それが再び参加をすることになったのは昨年（2014）のことであった。実は県立の博物館相当施設から撤退した後，私個人としては，国際協力のNGO活動の支援や地域のエスニックグループと協力したフェスティバルの事務局などの担当を行っていて，かながわの多文化社会の進展，それにさまざまな民族的な文化を表現するための「場づくり」

などへ個人的関心が高まっていた。

そうした経験を経て，本当に偶然であるが，2年ほど前から美術館を中心とした「ミュージアム」の関係者を対象とした事業の担当となったのである。10年ほど前の2004年，多くのミュージアムは地方財政の悪化に伴う予算や人員の削減，それに指定管理者制度導入など大きな制度改革の波に突入していた。その中で，本来のミュージアムの役割を改めて見直し，地域の文化拠点としてなくてはならない存在であり，社会を変革していく主体であり得るためにはどうすべき，といったことなど様々な角度から議論をしていく会議を私の財団が隔年で開催して，これまで6回実施してきている。ちょうど私がこの事業に関わりだしたころは，「ミュージアム」の対象も美術館から，博物館，自然史や科学系を含んだ博物館，動物園，図書館へと公共の文化施設に館種をひろげ，直近の回では，建物だけではなく，街づくりなどの実践にまでその対象を大きく拡大していたところだった。

このように，個人的な仕事の環境も大きく変化していく中，ちょうどみんぱくのホームページで博学連携教員研修ワークショップ2014の募集を見た。何年か前とは違い，展示運営も子どもたちへの直接学習活動をしているわけでもなく，ためらいながらも参加してみた。

県立施設を運営していた時は，ミュージアムと学校など外とのつながりばかり考えていた。たしかに，それは施設側の職員としては必要なことかもしれない。しかし，この研修ワークショップの面白い所は，そうした「線」の関係を丁寧に考えていくこともできることに加えて，「面」として，地域の中でミュージアムも一つの地域資源として捉えて，考えていくきかっけとなることである。

ためらいながらも参加してみて，ミュージアム内部の人間として参加していた時代と明らかに違った感覚で，捉えていくことができたのである。

ワークショップでは，みんぱくシアター「『多みんぞくニホン』を体感する」に参加した。ロールプレイングを中心に，外国人を取り巻く状況をまさに演ずることでその立場に立つことができる手法であった。新たな「多みんぞくニホン」の展示も前日じっくりと見学した。世界の展示をぐるっと回り，最後にこの展示があり，しかもこのニホン社会での生活からみられる「多文化」が伝わる資料が多くあった。

3　気づきと学びをつくるコミュニケーションをデザインするために

これまでの経験から，このワークショップは「博学連携」のノウハウ伝授や「実践の共有」にとどまらず，参加者自身の置かれている環境，ここで漠然と考えていることが異業種の人との出会い，豊富な資源と専門知，との化学反応から着実に新たな気づきや

考え方の広がりをもたらすことは言えよう。

まず私は，自らが運営する施設がもつ「資料」をきちんと理解すること，そしてそれを使って目を大きな世界へ広げていくきっかけとなる学習プログラムへと展開していくことを学んだ。

ところが，それはなにも展示と学校という「線」だけにはとどまらない。自らが暮らす地域社会にはどんな資源があり，そこにはどんな資料が存在しているのか。「多文化」というテーマで考えた時，ある特定のミュージアムが収集・保存・展示している資料を理解するだけでなく，例えば私が暮らす地域にどんな資源があり，そこにはいかなる資料があるのかという広がりを持って把握していくことへ発展していく。ミュージアムをはじめとする公共文化施設，大学や学会，研究所といった専門機関，その土地にある歴史的な史跡，建造物，さらにはエスニック・コミュニティや文化の継承活動，フェスティバルといった人の集まりもあるだろう。それら資源をまず発掘し，そこにある資料をつかんでいく過程でできる，ゆるやかなつながりを保ちながら相互理解が進んでいく中で，その時その時に求められる「学び」がニーズに応じて作られていく。そんな気づきと学びができるためのコミュニケーションをデザインしていく大切さを認識させてくれた。それが私にとっての「博学連携教員研修ワークショップ」である。

そのような思いに至りながら，言うは易く，いまだ実践にはなかなか結びついていないところが，私自身にとって相変わらずの課題ではある。